

論文の和文要旨

論文題目 『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳方式の研究

氏名 孟 達来

本論文では、『元朝秘史』のモンゴル語と音訳漢字とのパラレルフルテキストコーパスを構築し、音訳において現れるモンゴル語と漢字との対応関係の実証的分析を行い、漢字音訳における全規則を導出し、『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳方式の全体像を解明することを目的とする。

漢字音訳とは、日本語を含め、歴史上、漢語の周辺諸言語の表記に長らく用いられてきた表記方式である。漢字音訳によって、少なくとも 1000 年以上に亘って、様々な言語の文献が成立しているが、その言語学的意味を解明するには、まず漢字音訳方式を明らかにしなければならない。こうした研究にとって、典型的な意味を持つのが中国の明朝時代に漢字で音訳された『元朝秘史』である。『元朝秘史』の原本は『モンゴル秘史』と呼ばれ、モンゴル帝国時代の最重要文献であり、13 世紀にモンゴル文字で書かれたとされる。しかしモンゴル文原典が伝わらず、現存するのは 14 世紀後半に漢字で音訳された『元朝秘史』という文献である。言語学的観点から見ても、この文献が成立当時のモンゴル語と漢語の研究にとって、極めて重要な文献となるだけでなく、漢字表記（音訳）方式の研究にとっても貴重な資料と考えられる。

先行研究には、『元朝秘史』における音訳漢字の音推定と、漢字の一部の要素の音訳への関与だけが扱われており、漢字の全要素の観点からの音訳への考察は行われておらず、漢字音訳の全ての規則が明確にはなっていない。そこで、本研究では、『元朝秘史』の全ての音訳規則を導出し、漢字一つ一つの音訳における機能・役割を解明するために、漢字一字の単位で、漢字とモンゴル語の対応関係を含める『元朝秘史』のパラレルフルテキストコーパスを作成して、『元朝秘史』モンゴル語の漢字音訳に対する全面的な考察を行った。

本論文は、第一部「総論」と第二部「音訳における対応関係の分析」からなる。

第一部第 1 章では、『元朝秘史』の版本とテキスト構成、本研究に関わる主な先行研究を紹介した。まず、『元朝秘史』の版本は、「12 巻本」と「15 巻本」の二つの系統に分けられることを紹介したうえ、本研究が基づくのは「12 巻本」の「四部叢刊本」であることを示し、そのテキスト構成（音訳・傍訳・総訳）について説明した。次に、本研究に関わる主な先行研究を、漢語漢字音・音表記に関する研究、モンゴル語音・テキスト転写に関する研究、及び音訳における音表記以外の問題に関する研究の三つに分けて紹介した。そして今までの研究には漢字音訳の全ての規則が明確にされていないことを提起し、この問題の解明には、音訳におけるモンゴル語と漢語の「音」の対応関係と、「音以外要素」の対応関係を含むデータが必要であること、そしてこの

ようなデータを得るには、モンゴル語と漢字の対応関係を反映したパラレルフルテキストコーパスが有効であることを指摘した。

第一部第2章では、本研究の主な目的と基本仮説、研究に用いるコーパスの作成経緯を紹介したうえで、本研究の主な検討項目について説明した。まず、漢字音訳の方式に関して、「音の対応」と「音以外要素の関与」といった二通りに分けて考察する必要があると指摘した。また、漢字一字の音でモンゴル語音をスムーズに対応できるか否かにより、「音の対応」を更に「通常表記」と「特殊表記」という二通りに分けて考える必要があることを示した。

第一部第3章では、先行研究における音訳当時の漢語とモンゴル語の音韻推定に対して対照・分析を行い、本研究が基づく漢語音とモンゴル語音を推定した。まず、漢語音に関して、服部四郎(1946)、Halliday(1959)、楊耐思(1981)による音推定を「声母・韻母」に沿って比較し分析したうえで、音訳当時の漢語は白話であることに鑑み、漢語音を推定し、白話漢語の音韻体系を提示した。モンゴル語音に関して、服部四郎(1946)、Ligeti(1971)による音推定に対して比較・分析を行い、音訳当時のモンゴル語の音韻体系を確定した。

第一部第4章では、第3章で推定した漢語とモンゴル語の音韻体系に基づき、音訳におけるモンゴル語音と漢語音の対応関係を分析し、音対応規則を導出した。音対応の分析の際に、音訳において、対音は漢語伝統音韻学の「声母・韻母」の概念のもとで行われたこと、且つモンゴル語の音節末子音の表記に「特殊表記」が用いられることなどを考慮に入れて、音対応を「声母対応」「韻母対応」「末子音対応」といった三つのカテゴリに分けて分析を行った。結果として、音の対応に関する35種類の規則をまとめ上げた。そのうち、「声母対応規則」は7種類、「韻母対応規則」は21種類、「末子音対応規則」は7種類である。また、モンゴル語の音節末子音の表記に、入声漢字がよく使われていることを発見し、音訳漢字の選択には、声母・韻母だけでなく、声調もある程度考慮されていた可能性について提示した。なお、本章の最後に付録として、音対応規則の分析に基づいた「通常表記」に用いられる493種類漢字と、それらに対応されるモンゴル語音について、先行研究の推定音を含めてリストし、その中に本研究が基づく推定音を示した。

第一部第5章では、音訳における音以外要素の関与について考察し、その規則をまとめ上げた。まず、音訳における音以外要素の関与について、陳垣(1934)、服部四郎(1946)、栗林均(2006)といった主な先行研究を紹介したうえで、本研究の考え方を示した。そして、音訳において成り立つモンゴル語と漢字の対応関係の中から、音訳における音以外要素の関与について、(1)漢字の個義(意味)をモンゴル語語幹意味に合わせるケース、(2)漢字の意符をモンゴル語の語幹の意味に合わせるケース、(3)漢字の個義(意味)をモンゴル語の接尾辞に合わせるケース、(4)特定の漢字をモンゴル語の特定の語形に用いるケースの4種類に分けてまとめることができ、且つこれら4種類の音訳手法を各々規則としてまとめ上げた。

第二部は、「音訳における対応関係の分析」である。コーパスに基づく分析によれ

ば、『元朝秘史』において、全 581 種類の音訳漢字で 376 種類のモンゴル語音が表記され、全 807 種類の音対応が形成し、延べで 30202 語（モンゴル語）が音訳されている。これら 807 種類の対応関係が、「同じモンゴル語音に対応する漢字」と、「同じ漢字に対応されるモンゴル語音」という視点からみて、「モンゴル語音：漢字」＝「1：1」「N：1」「1：M」「N：M」という 4 つのカテゴリに沿って分類した。このうち、「モンゴル語音：漢字＝1：1」対応は 102 種類、「モンゴル語音：漢字＝N：1」対応は 22 種類、「モンゴル語音：漢字＝1：M」対応は 52 種類、「モンゴル語音：漢字＝N：M」対応は 74 種類である。

第二部第 1 章では、まず、単純な対応である「モンゴル語音：漢字」の「1：1」対応と「N：1」対応に関して、第一部第 4 章で導出した音対応規則を用いて、一つ一つの音対応を逐次に示した。

第二部第 2 章では、「モンゴル語音：漢字＝1：M」の 52 種類の対応に関して、用例を用いた分析を行い、音訳漢字の使い分けを逐次に確認した。

第二部第 3 章では、多項目の対応を成す「モンゴル語音：漢字＝N：M」の 74 種類の対応に関して、対応のセットごとの相関関係を明示したうえ、対応項目に対して用例を用いた分析を行い、音訳漢字一つ一つの使い分けを確認した。

最後の結論では、第一部「総論」の分析により導出した音訳規則である「音対応規則」と「音以外要素関与規則」をまとめて示すと同時に、第二部の「音訳における対応関係の分析」によって得られた結果を、「モンゴル語：漢字」の全 807 種類の対応関係の中で反映し、音対応だけの機能を果たす対応を「音表記のみ」と示し、音以外要素の関与がある対応に関しては、その用例（《傍訳》付き）を示し、音訳における漢字一つ一つの使い分けを提示した。

本研究の特色は、漢字音訳の検討において、漢字の「声母」と「韻母」だけでなく、一部の音表記の分析に「声調」関与の可能性も考慮に入れて検討し、且つ、漢字の「字義」「意符」を含めた諸要素の音訳への関与について検討を行い、全ての音訳規則を導出したことにある。また、データ処理に関して、漢字一字の単位で、漢字とモンゴル語の対応関係を含めた『元朝秘史』の平行フルテキストコーパスを構築し、モンゴル語と漢字の全対応関係の分析を可能にしたことも、本研究の方法論としての特色であると言えよう。

本研究により、『元朝秘史』の音訳における全ての規則と漢字音訳方式の全体像が示されたと思われる。それにより、音訳当時のモンゴル語音の実態と漢字音の実態への理解を深めることができると思われる。また、本研究のもう一つの目的は、研究を通じて得られた方法論と成果により、漢字音訳の研究に新しい方向性を与えることである。